

学校を核としたコミュニティの広がりを感じて 確かな連携を築いていくために

世田谷区立給田小学校 学校運営委員会通信

10月17日、校長室にて第6回
学校運営委員会が開かれました。

議題

1. 校長より
 - ・「健康安全推進学校」としての表彰
 - ・先般の台風時の対応に関して
 - ・学び舎での教員研修について
2. 委員長より
 - ・『月刊社会教育』への寄稿
 - ・委員会日程の再検討
 - ・ワーキンググループ編成の提案
3. 委員より
4. リエゾン・オフィスより

出席者
井上、清水、程原、田中、溝口、
橋、増本、林、杉山、片山
安部
リエゾン・オフィス

最初に、杉山校長より「本日、給田小が『世田谷区健康安全推進学校』として表彰された」との報告があり、賞状と楯が披露されました。続いて、10月16日の大型台風への対応について「登校時間を遅らせる旨の緊急メールと未登録者への電話連絡を6時から1時間毎にいった。ただ、家庭の事情や連絡不備で、8時までに登校してしまつた児童が9人いた。保護者から前日に対応を決めて欲しいとの声があつたが、世田谷区教育委員会から前日ではなく当日の朝、各校で判断するよう指導されている」との説明がありました。委員からは「児童の安全に関わることがらなので、緊急時の登下校や連絡の体制などについて再点検をお願いしたい」との要望がありました。次に、「給田小は2つの学び舎に所属しており、運営上の工夫が必要である。今後の教員研修のあり方について、委員のみなさんの意見を伺い合いたい」と問題提起があり、話し合われました。委員からは「子どもたちや保護者が進学に不安を感じないよう、どちらかの学び舎に偏つた活動にならないよう配慮をお願いしたい」などの意見が出されました。

次に、井上委員長より「『月刊社会教育』(国土社)という雑誌より原稿依頼があつた。給田小の事例をもとに「コミュニティ・スクールで何が変わるのか」と題してまとめてみた(10月号掲載)ので、ぜひ、読んで欲しい」とのお話がありました。続いて、仕事の都合等で定例会議への出席が少なくなつてしまつた委員がいることに関して、「定例会議以外に、例えば、通信の編集を中心に活動するワーキンググループやコミュニティ・スクール(以下、CS)活動の今後を検討するチームをつくり、委員の活動を促進してはどうか」との提案がありました。

この後、清水委員が「10月13日に行われた給田幼稚園運動会の『キッズ・ソール』を増本委員、橋委員と見に行つた。5年生の先生もいらして、幼小交流での深まりを感じた。また、10月14日の給田町会運動会には森田委員が仕事の合間をぬって駆けつけていた。こうして運営委員がさまざまな行事に参加してCSの視点を身につけることが大切だと思う」と感想を述べました。

これに対し、井上委員長からは「給田小学区域には2つの町会と1つの自治会があるが、今年度からはそれぞれの若手が学校運営委員として活動してくれている。学校を中心に町会や自治会が交わることは、地域住民のコミュニティづくりとしても意義深い」とのお話がありました。

平成25年度 第5号
平成25年11月1日
世田谷区立給田小学校
学校運営委員会
委員長 井上健

祝 建優勝！ 女子教職員バレーボール大会



スポーツの秋。給田小の先生にも、スポーツを楽しんでいる方がたくさんいます。今回は、8月30日(9月24日)に行われた女子教職員バレーボール大会(世田谷区立給田小学校体育連盟主催)での給田小チームの熱闘をお伝えします。

9月9日に行われた3回戦(於給田小体育館)、昨年度の優勝校・桜小に接戦の末、勝利を手にした給田小は、悲願のベスト4に進出しました。

9月18日、準決勝の相手は赤堤小。拾って繋げる粘り強さが武器の手強い相手です。勢いに乗る給田小は、エースアタッカー・長島先生の狙ったコースに見事に決まるスパイク、レシーブでも大活躍の川崎先生の強烈なサーブが気持ち良くなり、試合前は緊張で硬い表情だったキャプテンの荒川先生も試合が進むにつれ笑顔も見えチームを引っ張っていました。会場校の強みで、得点するたびに、大応援団からは歓声と拍手がわき起こります。快勝して試合後に整列した先生たちの顔は、初めての決勝進出に向けて紅潮していました。最後に、この日審判としてお手伝いに来てくださった給田小PTAバレー部のみなさんへ両チームからお礼の言葉がありました。

9月24日、桜小で行われた松丘小との決勝戦では、惜しくも勝利を逃して準優勝となりましたが、プレーしている先生、応援に駆け付けた先生が1つになって戦う姿に「チーム給田」の強さを感じました。まさに、みんなで勝ち取った準優勝でした。

9月18日、準決勝の相手は赤堤小。拾って繋げる粘り強さが武器の手強い相手です。勢いに乗る給田小は、エースアタッカー・長島先生の狙ったコースに見事に決まるスパイク、レシーブでも大活躍の川崎先生の強烈なサーブが気持ち良くなり、試合前は緊張で硬い表情だったキャプテンの荒川先生も試合が進むにつれ笑顔も見えチームを引っ張っていました。会場校の強みで、得点するたびに、大応援団からは歓声と拍手がわき起こります。快勝して試合後に整列した先生たちの顔は、初めての決勝進出に向けて紅潮していました。最後に、この日審判としてお手伝いに来てくださった給田小PTAバレー部のみなさんへ両チームからお礼の言葉がありました。



決勝戦が終わった時、胸が熱く広がっていたのは、たくさんの感謝の思いでした。汗びっしょりになりながらみんなで練習を重ねた日々、温かい励まし声、忙しい中応援に駆けつけてくださった多くのみなさん、すべてを力にして勝ち取った準優勝でした。チーム給田で戦えたことを誇りに思います。本当にありがとうございました！
(キャプテン・荒川先生)

教えて！井上先生



前号に続いて、「世田谷9年教育」への取り組みを紹介いたします。

今回のテーマは、給田小の子どもたちと上祖師谷中（上中）、烏山中（烏中）と生徒との交流活動についてです。今年度は、上中、烏中、それぞれの学び舎で、6年生を対象に「部活動体験」が行われました。運営委員とリゾン・オフィスが取材を兼ねて同行しましたので、その様子を交えて井上先生にお話をうかがいます。

この数年、運動会やサマースクール、烏山地域あいさつキャンペーン期間中に、給田小で中学生の姿を見かける機会が増えているように感じます。そうしたことも、「学び舎」の効果と考えるといいのですか？

井上先生：そうですね。前号でお話したように「世田谷9年教育」は必ずしも「学び舎単位の活動」を言わなければならないのですが、中学校や中学生を身近に感じる機会が増えるのは良い取り組みですね。



部活案内表示を作り小学生を迎えてくれました。「部活動体験」に参加した子どもたちはどんな様子でしたか？



中学生が上からボールを落とす練習、小学生が打つ練習。おっしゃる通りですね。中学生に感想を聞くと、「6年生が思っていたよりしっかりと返事をしてくれました。小学校時代、わかたけと一緒に活動した頃とは違いました」「教えるのが苦手なので不安でした。6年生の子も緊張して

「部活動体験」は、土曜授業日だった9月14日の午後に行われ、給田小からは、上中に24名、烏中に23名が参加しました。いつもは元気な給田小の子どもたちが中学校の正門が近づくにつれてだんだん無口になるなど、かなり緊張しているように感じられました。どの部でも、中学生が自ら見本となりながら指導してくれたのですが、そんな姿に6年生たちは「みんな、自分から指示を出しているすごいなと思った」「優しく教えてくれて楽しかった。もう入る部活が決まりました」「憧れの部を体験してドキドキした。先輩が優しく、早く中学に行って部活をしたくなりました」と、感激していました。

井上先生：それはよかったですね。小学生にとって、中学生が憧れの対象（ロールモデル）になることはとても重要なことです。また、中学生自身にとっても、小学生という「後輩」ができることで、自分の成長を感じる良い機会になりますね。

いる感じだったけれど、教えたとおりやってサーブが入り、喜んでるのを見て、私も嬉しくなりました。来年、新入生が来る時の心構えが出来ました」と語ってくれました。上中の飯塚校長は「この時期に部活動体験で小学生を指導すると、1年生にも上級生となっていく意識が生まれる」と話されていました。ついこの間までランドセルを背負っていたのに、いつのまにかたくましくなっていてびっくりしました。

井上先生：中学校の部活動は、小学校のクラブ活動とは違い、生徒が自主的に運営し、目標に向かい、お互いを高め合っていく場です。中学校の象徴ともいえる部活動を体験したことで、中学校に対する漠然とした不安が期待感に変わっていくとしたり、それだけでも、意義ある試みではないでしょうか。



本校にそう思います。昨年度の学校運営委員会通信で、「わかたけ活動」を取り上げ、そつした異学年交流がまさに子どもたちにとつての「地域活動」である価値づけましたが、小中交流はそれをさらに広げるものなのですね。ただ、今回の部活動体験では、6年生の数がちょっと少ないように思いました。烏中の星野校長も「昨年は夏休み中に開催で参加が少なかつたので、2学期に入って最初の土曜授業の午後1設定したが、期待していた参加者が増えなかつた」と残念がっていました。来年は、もっと増えることを期待しています。

井上先生：私たちは「小学校と中学校では世界が一変する」と思いがちですが、社会状況の変化のなかで、最初の6年間とその後3年間で区切ることに意味が薄れているところもありそうです。もちろん、人生の節目を感じたり、ハードルを越えることも重要ですが、必要以上に壁を作ってしまうのは問題でしょう。将来、公立中学に行くか、私立中学に進学するにかかわらず、小学生が中学校の雰囲気を感じ、成長への意欲を高めることができるような活動を多いに期待したいですね。教員（大人）が間に入らないでも、子どもたち（児童・生徒）同士がかかわり合い、それぞれが相手へ敬意や尊敬情を育んでいけるような環境をつくってあげたいものです。

展覧会のお知らせ

給田小100年に向かっていく51年目ということで、全校共同テーマを「伝えたいもの」としました。古民家や一輪車など給田小の風景が題材の学年もあります。子どもたちはみんな工夫して作品を作っているところです。当日は、地域の方も、子どもたちがどんな顔をして制作したか思い浮かべながら鑑賞していただきたいです。 図工・鈴木真理子先生

11月14日(木)～16日(土)
地域・保護者の鑑賞日は15日・16日

是非ご覧ください！



初めて竹刀を持つ子にも丁寧に指導。

井上先生：私たちは「小学校と中学校では世界が一変する」と思いがちですが、社会状況の変化のなかで、最初の6年間とその後3年間で区切ることに意味が薄れているところもありそうです。もちろん、人生の節目を感じたり、ハードルを越えることも重要ですが、必要以上に壁を作ってしまうのは問題でしょう。将来、公立中学に行くか、私立中学に進学するにかかわらず、小学生が中学校の雰囲気を感じ、成長への意欲を高めることができるような活動を多いに期待したいですね。教員（大人）が間に入らないでも、子どもたち（児童・生徒）同士がかかわり合い、それぞれが相手へ敬意や尊敬情を育んでいけるような環境をつくってあげたいものです。

先生と学校運営委員との「フリートーキングの会」

夏休みも終わりに近づいた8月29日、先生と学校運営委員との「フリートーキングの会」が開かれました。今年は、校長をはじめとする先生が28名、学校運営委員7名、リエゾン・オフィスの2名が参加しました。最初に自己紹介があり、その後、杉山校長からの提案で、「保健体育部会」「生活指導部会」「特別活動部会」に分かれての話し合いになりました。これは、先生がたが校務分掌として活動している4部会の中の3つの部会です。もう一つの「研究推進部会」の先生はいずれかの部会に分かれて参加しました。



司会：長島先生

保健体育部会

はじめに、土器屋先生から、1年生のスポーツテストの結果について報告がありました。20mシャトルランの成績が都や区の平均より大幅に高かったことについて、「日本女子体育大学の学生が補助に入ったことや保護者ボランティアと高学年児童が応援したことも影響しているのではないか」との指摘がありました。沓澤先生からは「立ち幅跳びの成績が伸びないのは、跳ぶコツがなかなかつかめないからだと思う」と実演を交えた話が出ると、「昔は『ゴム跳び』などの遊びの中で『跳ぶ』ことを自然と身につけて

いた」「子どもたちが日頃の遊びの中で体を使わなくなっている」など、日頃感じている意見が活発に出されました。



司会：安部先生

生活指導部会

まず、安部先生からあいさつキャンペーンの報告がありました。昨年からの「あいさつコッコーちゃんの成長カード」を使って、あいさつができたか振り返るようになっているが、子どもたちはわりと「できている」と答えていても、先生がたは、「まだまだできていない」と思っているとのこと。委員から「数年前よりもできるようになっている。保護者同士もあいさつするようになった」という意見が出ると、「前任校ではもう少しできていた」「給田小の子は素直。教師が意識を高く持って盛り上げていけば、ついてくる」と先生がたからもさまざまな意見が出されました。

あいさつのことだけでなく、自分の気持ちを伝える言葉や、人を思いやる気持ちを、どう育てるかについても話し合われました。

特別活動部会

司会の谷平先生から「学校行事にとらわれず1学期の教育活動全体について話し合えよう」との提案で口火が切られました。先生がたから「保護者の給食補助や水泳の着替



司会：谷平先生

えボランティアには本当に助けられていてありがたかった」との話がありました。それを受けて、これらのボランティアが始まった経緯や、活動の意義について確認しました。給田小に赴任して日も浅い先生も多いなか、先生と委員との共通理解が深められました。委員からは「これまでも意見を出し合いながら改善してきたが、もっと学校と委員とがお互い遠慮せずに会話を大事にして、教育活動がより良くなるようにしていきたい」と、意欲的な発言がありました。

サマースクールから広がる子どもたちの学び



絵本「ほくがラーメン食べているとき」を題材にして、教えていただきました。

9月10日、4年生各クラスを対象に、「読書感想文を書くコツ」についての特別授業が行われました。教えてくださったのは、高校生の読書感想文全国コンクール審査員もされている日本女子体育大学の稲井達也教授です。先生には「読書感想文名人になろう！」で講師をしていただきました。その講座を見学した杉山校長がお願いして実現した授業です。

最初は緊張している様子の子どもたちでしたが、語りかけるような読み聞か

今回は先生がたが校務分掌として活動している部会に分かれて行われたため、テーマが絞りやすく、話しやすかったようです。また、少人数のグループごとの話し合いだったので、給田小の子どもたちの現状など具体的な話も聞くことができ、中身の濃い有意義な意見交換になりました。

先生も運営委員もメンバーが変わっていく中、給田小のCSとして、みんなが同じ方向を見据えて実践を積んでいくためには、口頭からのコミュニケーションが大切であることを再確認しました。今年で4回目となったこの会は、給田小のCSのビジョンと先生がたによる教育活動が繋がっていく大事な場となりました。

「自分が感じたものを自分の言葉で伝えることが大切です」と、読書感想文の書き方をわかりやすく教えていただきました。

これまで日本女子体育大学とは運動を通してだけの連携でしたが、新たな繋がりが生まれ、給田小の子どもたちの成長を支える力に広がりを感じました。

烏山神社祭礼・お神輿ミミテイ

学校運営委員 清水啓子

烏山に暮らし始めて今年で30年になりました。以前住んでいた深川で、すっかりお神輿に魅せられていた私は、毎年9月23・24日の烏山神社の祭礼でお神輿を見るたびに、「烏山でも担ぎたい！」と、血が騒いでいました(笑)。そして、引越してきて5年目の祭礼の日、お神輿の神酒所に行き「貸し半纏ありますか?」と思いついて聞いたところ、青年部の方が快く対応してくださり、念願のお神輿を担ぐことができました。あれから25年経ちましたが、私は年に一度のこの祭礼を毎年楽しみにしています。



22期生 西澤和義さん
25期生 森田慎一さん



43期生 清水然さん
2期生 杉田和明さん

お神輿が、給田小学区内で唯一の休憩所に入ってきました。お神輿の先頭を担いでいるのは、全員給田小の卒業生(20代~60代)です。



今年、9月24日は平日でしたが、大勢の担ぎ手が集まりました。



今年、谷中生姜・じゃがいも・ナスが地元野菜として並びました。

ふんだんに用意され、接待してくださいる地域の方は新参者の私にも優しく、お・も・て・な・し。「烏山っていい所だなあ」と実感しました。

ところが、担ぎ手を接待する場所は昔に比べどんどん減ってきていました。それを見かねた森田慎一さんが「南烏山6丁目地域の野菜を出して接待しよう」と提案し、数年前に実現しました。そして私も「地域の人」として担ぎ手の接待をする立場になりました。野菜は、給田小でもお世話になっている大谷一彦さんの畑で採れたものです。その他の飲み物や食べ物も近隣のみなさまからの奉納でまかなわれています。



青年部副部長 2期生 鈴木実さん

給田小学校の卒業生で学校運営委員でもある森田さんは、今年からは烏山上町奉賛会青年部部長として、2日間の神輿巡行を取り仕切られました。

あの頃、ベビーカーでお祭りに参加していた長男、まだ生まれていなかった次男も今は、お神輿の担ぎ手です。父親の転勤で、私は生まれ育った土地に縁がありませんでしたが、子どもたちにとつて、ここは、どこにいても年に一度必ず戻ってこられる「地元」になりました。当時、中高生だった女の子たちが結婚してその子どもたちもお神輿の担ぎ手になっていたり、息子の同級生が中学生の頃と変わらない笑顔で話しかけてくれたり、やんちゃをしていた男の子が青年部に入り先輩の指示に従い、てきぱきと祭りの運営を手伝っていたり…。毎年地域の子どもたちが成長していく姿が見える「お神輿コミュニティ」は長いスパンで子どもたちを見守っています。



「給田囃子連」のみなさん

13期生 田中龍次さん
17期生 土屋俊幸さん
給田小子どもばやし 指導者 伊藤弘康先生

烏山と給田、お囃子の交流

今年も、烏山をこよなく愛する烏山上町奉賛会青年部のみなさまのおかげで無事にお神輿の巡行が終わりました。来年のお祭りではどんな出会いがあるのか…今から楽しみです。

あとがき

子どもの入学以来、たくさんのお会いがありました。「私たちの子どもが地域の学校」を見守り、支えてくださっている多くの地域の方がたとかかわれたことで、地域の一人であることをより深く意識できるようになったように思います。また、たくさんのお子ともたちと接することで、自分も育てられていることを実感しています。

給田小の子どもたちは下級生にもものを教えるのがとても上手です。ひざを折って目線を合わせ、優しく分かりやすい言葉で話しかける姿をよく見かけます。それは、自分もそうしてもらった記憶があるからにほかなりません。たくさんのお人のかかわりの中で成長できる子どもたちは幸せですね。

学校運営委員

増本陽子



「学校運営委員会通信」に掲載されている写真(個人が特定できる)等を含む個人情報、ご本人の承諾を得て掲載しています。